

関西支部勉強会レポート

第18回 関西支部勉強会

インタラクションをどのように分析するのか：エスノメソドロジーの視点から

日時 2012年4月20日（金） 18:30～20:30

場所 京都大学 物質－細胞統合システム拠点 本館 セミナー室

ゲスト 秋谷 直矩氏（京都大学 物質－細胞統合システム拠点 科学コミュニケーショングループ 特定研究員）

人数 24人

1. 概要

Ethnomethodology = 人々の方法論を、人々から学ぶ学問

- 人々が社会を成り立たせている方法を調べる。
- 観察者が研究するために方法論を用いる通常の研究とは違う。
観察対象である人々もまた、さまざまな方法や方法論を用いて生活しているという観点から、その方法や方法論自体を探求する学問。
- 人々が社会を成り立たせる方法の一つとして、相互行為がある
- 会話、身体的振る舞いを見る
- 周囲環境との接続も見ていく
⇒（人々が行っている水準を失わない形で）どのように成されているのか、見ていく（記述していく）。

*以下、Ethnomethodology = EMと略します。

2. 社会学とは？

なぜ人が一緒にいることができるのかを調べる学問

- 人々が一緒にいられるのはなぜ？を調べる。
- 一緒にいることができる要素に、規範や信頼等のつながりがあると期待されるので、それを調べる。

関西支部勉強会レポート

理念的には、モデルを作って、それと現実との差を自覚し、その差をなくすようにモデルを作り直す（現実近づけていく）。

- 人々の理解はバラバラ（まとまらない）。
- 研究しやすくするため、（研究者が）モノを"定義"する（数えられるようにする）。 例：デュルケム『自殺論』

EMでは定義しない。

- 曖昧である、多義的であることに重みを置く（バラバラになることを受け止める）。
人々が物事に対し判断を迷っている、どうにかして分けるというやり方もまた、注目すべきところ。

EMに方法論がない。

- その固有のやり方に寄り添って記述していくほか無い。
- 「人々の方法」は見られてはいるが、気づかれていないものが多い。
例) 会話での助動詞「に」の使い方など。
記述できなくても、人々は何事も無くそれを使っている。
- フィールドを選ばない。日常会話だけでなく、病院での会話、動物との会話なども研究対象。

人々が行っていることには、無限のやり方がある。

- それを調べるには、現場に浸り、中の人になりきってしまう。
(イマージョン)

3. EMの事例：日常会話

「おはよう」だけでは、EMでは挨拶とは限らない。（理解に照準を当てる）

- 「おはよう」に対し「おはよう」と返しているのが認められないと、挨拶とは限らない。「さっきあいつなんて言ってたの？」という質問の答えとしての「おはよう」だった、ということもあり得る。
- ⇒ 人々の水準に合わせて、シーケンスの前後から意味を見ていく。

関西支部勉強会レポート

日常会話では・・・

- 会話の中では一人がしゃべり、それが終わってから次の人がしゃべる、というのが成り立っている。
- ⇒ 隣接ペアが生まれる。
 - 誘いに対して応答
 - 挨拶に対して挨拶
 - 問いに対して答え という規範関係

分析するには・・・

- ・ 会話をできるだけ正確に書き起こす。
- ・ 発話の前後から、何が行われたのかを同定する。
- ・ 身体動作や目線、周辺環境等を加味してデータを見直す。
 - 人々が何をしているのか把握できてきたら、分析の照準をどこに定めるかを定める。※このとき、解釈し過ぎない（人々がやっていることから離れない）ように気をつける。
 - そこから、フィールドワークをしていく。

4. まとめ

データから記述できることだけでも、よくわかることがたくさんある。

- 上のやり方は、人々がやっていることに照準した、その水準の記述から見えてきたもので、「方法」は無かった。

人々がやっていることが精密で合理的であるため、その記述も精密で細かいものになる。（細かすぎることはない）

今回は会話の規則を取り上げたが、これはあくまで一例。（概念をみるなど）

実際にやっていることのレリヴァンスから離れないことが大事（人々のやっていることに愚直になる。）

- レリヴァンスが維持されている（つまり、加工されていない）から、再分析できる。

関西支部勉強会レポート

「見えるレベルで」しか分析をしない。

- 研究者間だけでなく、被写体の人やそれ以外の人とも、データセッションができる。
- 共有しやすい。

5. 質疑応答

Q. エスノグラフィとどう違う？

- 大きな違いは、エビデンスの出し方の違い。
EMは再分析が可能だが、エスノグラフィは再分析が難しい。

Q. EMの著名な例は？

- ルーシーサッチマン：ユーザインターフェースが良いかどうかを、どのように良くてどのように悪いか、を把握することができる。アンケートだと後で思い出しながらになってしまう。
- 「アグネス、彼女はどのように女になったのか」女性として生きるためには、過去に男性であったことが露見してはいけない。アグネスは、それが露見しないように、様々な方法を用いていたことが、彼女の語りから明らかにされた。

Q. EMのホットトピックは？

- 最近『概念分析の社会学』という本が出た。これを読めば、エスノメソドロジー研究が「会話」の研究の範疇にとどまらないということがわかると思う。

Q. 方法を見るのか、方法論を見るのか？

- 厳密な違いはない。人々が方法論を参照したりしている場合は、それも見るが、大切なのは「実際に見えるところでとどまる」ということ。それより深くは見ない（過剰解釈はしない）。

Q. 非言語のビデオデータを見たときに、何を記述していけば良いのか、コツは？

- ターンごとに見ていく。言語問わず、人々の行動は順番でできている。

関西支部勉強会レポート

Q. 科学コミュニケーションにどう活かしていくのか？

→ 知識の非対称性をどうするか（科学者と一般人との知識量の差）、「中小効果（科学的知識が、常識的知識に対して優越性をもってしまうような事態）がもし実際に起きているとすれば、その実態がどうなっているのかを明らかにできる。

Q. 動物間のやり取りに対してEMでどう解釈するのか。

→ 人は動物になれないし、EMは人の日常的知識の水準で記述していくので、動物同士のインタラクションの分析可能性については、よくわからない。ターンテイキングなどは動物同士のやり取りにもあると思うが、記述の妥当性をどこに置いたらいいのかわからないので、私としてはなんとも言えない。

科学コミュニケーション研究会 関西支部有志

第18回勉強会・記録担当：山内 俊幸（関西学院大学）

第18回勉強会・運営担当：水町 衣里（京都大学）、加納 圭（滋賀大学）